



重ね着と薬

田畑 忍

私は「寒がり」屋で、そのうえ「暑がり」屋である。真夏になると、バカに暑くてやりきれないし、冬になると寒くて全く困ってしまう。だからまことに厄介な弱兵だが、これは今に始まったことではない。弱年の頃からそうであった。ただ以前は重ね着をしないで、懐炉をお腹と背中に入れていた。それでもよく風邪を引いた。

ところが十年ばかり前から、冬になると、私は、靴下五足・パッチ五着・シャツ四着・スエーター二枚を重ねて着るようになった。それにチョッキと上着とオーバーコートを着るの、十二単重以上と言ったところだ。だから、冬の私は外観的には割合にふとって見える。そんなにたくさん着込んでいて歩けるのかといぶかる人もいるが、案外にさっそう？と歩くので、不思議がる人もあり、疑う人もある。殊に靴下五足には驚く人が多い。

しかし、このような重ね着のコツは、比較的に薄くて暖いものを選ぶことにある。毛のものよりは人工繊維のものがよく、その中でも軽いものを選ぶという工夫だ。人工繊維を着るように勧めてくれたのは、小野ふさ子夫人と今は亡き風見

章氏であった。だから冬が近づくと、いや秋九月の末ともなれば、この二人のことが思い出される。現に朝夕は、パッチ三枚を着込んで、靴下三足をはいている。薄着の若い人たちが風邪を引いているのに、私が秋風邪を引かないのは、この用心のおかげであろう。

だから、先日北海道へ行くのについても、北海道はうんと寒いとおどかさされて、スエーターやたくさんシャツなどを鞆に入れていった。ところが、オーバーコートを携えて、九月二十九日の正午、千歳の空港に着いて見ると、小雨が降っていて意外に暖かい。そうして車に乗ると車の中はむしろ暑く、また札幌市内のレストランの三階で昼食をとると汗を感じて、上着をぬがざるを得なくなった。札幌が京都や東京よりも暖かいというのはどういうわけだろうか、と思った。札幌の人たちは今日は特に暑いのですよと言うのだが、原爆実験があつて以来、気候現象が変調子になってきたのだろう。

ちょうど網走への車中で午後六時前五分。そして外はとつぷりと夜のとりばりに包まれていたのだが、やはり秋の北海道を旅行しているという感じはしなかった。しかし三分停車の

旭川でプラットホームに降り立ってみると、すこしく寒い。おそらく北行するに従って寒さを増してゆくのであろうが、三十数年前の七月に遠軽に行ったときにストーヴを焚いてもらったような夏なお寒い北海道は、今はなくなっているらしい。とにかく北海道の広野を走っているというような実感がしなかった。東京から一時間で飛んできたということも、恐らくはこの感じの原因の一つになっているのかも知れない。網走の駅で下車するときさすがに寒く、翌朝ホテルを出ると、雨の戸外は晩秋の寒さであったが、それでも網走の人たちは年ごとに雪もすくなくなってきたと言っていた。

*

話が横に外れてしまったが、本題にもどって、私の薬の話をしよう。私は実は幼年の時から薬のおかげで生きてきたとも言える弱虫で、がしんたれである。富永老先生の漢方薬で死の一步手前でハシカが治って以来、漢方薬をよく服まされるようになったが、近所の西洋医の先生のお世話にもなった。谷口先生・井上先生・中神先生・西田先生等々の御恩を回想することもしばしばである。その後、中学時代になって粗食にもかかわらず健康体になったが、大学予科のときに沼津で急性心臓脚氣を患った。この病気を治していただいた青木先生には、その後一度もお会いしていないが、汽車で一時間おきに注射をしていただきながら滋賀県草津の拙宅まで送っていただいた御親切を忘れることはできない。沼津でつきつきりでお世話をして下さった茂木夫人（のちに渡辺の小母

さん）は、先年長逝されるまで音信をつづけていた。その小母さんを堀豊彦さんも教会の關係で御存じであったことを御逝去のすこしく前にお聞きした。

ところで、沼津での病氣の予後に、肋膜炎を発したりして私は羸弱るいじやくになってしまった。それいらい薬石に親しむようになった。中学時代に十三貫あった体重が十貫半になって、それが今もずっと続いているのである。大学卒業後も胆石症・脊髓カリエス・盲腸炎・腎石症等を患ったほか、年中よく風邪を引いた。また腹痛を起した。今でも風邪を引くが以前よりもよほどマシになった。風邪を引くと今では漢方薬を服む。盲腸はアクチゾールで厚生館の坂部老先生に治していただいたが、鼻下の髭はその時、老先生のアドヴァイスに従った記念である。この頃は、厚生館で安藤先生・佐々木先生・船坂先生等々にお世話になり、またビタミンBの注射をしていたが、アリナミンを連服しているほか、時々三粒丸を服む。三粒丸は六神丸によく似た高貴薬で、これは細野先生の特製品だ。六神丸も私には必要薬で、インドとヨーロッパに行ったときには六神丸とハブ草で押し通した。睡眠薬にはコントールを使用している。またわるいものを食べたと思うと、すぐに正露丸を服むことにしている。癌ノイローゼになったこともあるが、今では心配しない。のどを痛めると厚生館でトローチをいただいたり龍角散トローチや仁丹トローチをなめたりする。桜沢式の食養生もしているが、いつの間にか玄米食主義をやめてしまった。しかし小食かつ単純食で、肉食や

魚食はめったにしない。野菜もあまり食べない。チーズを食べることもあるが、これもそうほしくはない。果物も西瓜・バナナ・梨・リンゴの四種類は絶対に食べない。菓子断ちをしていたが、あることを機縁に数年前から食べることにしている。しかしそうほしくはない。私には御飯かパンがあればそれで足りる。餅や素うどんや素そばも好きな方だ。要するに穀物食動物と言うことになるであらう。しかし、こんな粗食生活の弱兵が肥えるはずはない。私のことを、断食をしたことがあるので、ガンジーと言う人もあるが、ガンジーではない。先日或る友人が、東大の大河内学長は「肥えたソクラテス」で、私の場合は「やせたソクラテス」だと言ったが、もちろんソクラテスではない。痩せても枯れても私は私である。一部の人たちは私が精神力で生きているように言うが私は葉と重ね着と人々の親切でやっと生きていると言わなければならない。しかし、無実の罪で服役中の小柄の村上国治氏（四

十六歳）に会って、この不屈不撓の人こそ、精神力で生きている人だと思った。その氣迫、その澄みきった眼眸、その鋭い英知、肉体的の衰えを克服して横溢しているその元氣。私は権力悪と闘って鍛えぬいて到達したのであるうその神々しさに胸打たれる思いがした。所内の人たちからさえも尊敬されているその人を見るにつけ、人間には最上・最善の人間と、最悪・最低の人間があるが、その相異の余りにも大きいことを今更のごとくに痛感せざるを得なかった。

それよりも、帰りの飛行機から見た青富士のすばらしきには、非常なる感動を覚えざるを得なかった。

白雲の湧き立つ中に紺碧の

富士を浮べる秋空を飛ぶ

（法学部教授、政治学・憲法）

自 転 車 通 勤

小 松 幸 雄

これが雑誌の编者から与えられた題。この殺人的な自動車洪水のさ中にも、物好きにもこと欠いて大学に自転車通勤する変り種が、いや命知らずの無神経男がいるとでもいう点が编者の関心があったの設題か。としても無粋な題ではある。しせんと筆がしふる。

でも考えてみると「凡て存在するものには道理あり」「*Alles Dasein ist vernünftig*」といわれるからには「*まじ*」すべて
の行為もまた同然「*Dann noch alle Taten dasselbe*」と
対句をひねってみたいのがわたしの持前。

十数年前から続けているわたしのこの行為について、友人

から「もういいかげんに」の忠言をうけたのも一再ではなかった。それでもわたしはかたくなまでに老朽車にまたがることがをやめていない。雷族様、タクシー族様、さては自家用族様、お急ぎの御様子ですからどうぞお先へお越し下さいと、わたしは都大路の片隅を音もかき立てず悪臭も放たず、ひそかに通らせていただいている。税金は真正直に過重のものを滞りなく払わせていただいているのだが等と、不心得な言葉は決して出さない。ただわたしは昔から「あえて天下に魁せず」の鍼言が好きで、人生行路をたどってきたつもりだが、このところ「あえて天下に殿す」と改訂版を作った心の銘としている。それかあらぬかあるとき雷族から「オッサン永生きするぞ」とお叱りの言葉をぶつけられて風のごとく馳ぬけられた。その時も少しもあわてず「I go on my way at my pace」ペースに乱れはない。近頃になって時々自転車の上で「俺のデザイは明治開化の表徴であったジャンگری頭をきらい、依然としてチョン髷で一人孤節? を守り通した頑固者だった」と聞かされていることを思い出す。どうもこの血がわたしにも伝わっているのかな? とか、馬鹿なとんまなところに力を入れて力みかえるドンキホーテ的反骨精神というものか等とも考えてみたり。粋(いき)とは江戸町人が士族に対する反抗的意気地から由来した日本文化の誇るべき美意識であると知る。しかしわたしの自転車通勤も自動車族に対する意気地ではさらさらないが、この意気地はとも「いき」に昇華しうるものではない。ボードレールが醜惡の中に

も美を見出したことはわたしの美をみる目を開かせたが、どういひき目にみても、わたしも車も定年すぎたものであって、そのとり合せには美とは凡そ縁が遠いものだ。いや老醜ばかりだ。しかしそう卑下することもあるまい。この行為は美の世界のことでもなく、アダム・スミスのいわゆる「便宜」の世界に属することではないかとも考えてもみる。

とにかく、現代の市民意識からすれば、わたしは変り者であろう。青年時代から自分に課した戒律は沢山ある。たとえば「われあえてジェントルマンたらず」とか「われ酒烟をたしなまず」とか。その中に「われ自家用車をもたず」も追加されたのであった。これらについては註釈する必要があるが、それをするにはここでは余白がない。ただわたしが自動車に乗りかえないのは、戒律に忠実だというのではない。わたしが流行というものに無感覚であり、むしろ流行を馬鹿にするといった言いすぎで、敬遠するたちだからなのだろう。いや時流に乗れない田舎者がわたしの性なのだろう。漱石の詩句に「独往孤来不斉俗 山居悠久没東西」というのがある。わたしの愛好の句だが、漱石の気位と気骨はなかなか世間と同調できなかったであろう。俗と齊しからずと構えてはオーナードイバーになったり、気軽くドライブする気やすさはなからう。いわんやでっち小僧ごとき者の乗る自転車通勤などとは言語道断である。また想い出すのであるがわたしが戦後随分たつての時、旧帝国大学の誇り高き高名教授未亡人とつれだって散歩していた時、たまたまその大学のこれま

た有名教授が登山帽を平気にかぶっておられたのを遠くから見られて、「今時の大学の先生の柄のわるくなったこと」とおっしゃったことをよく覚えていた。わたしはこの大学教授の誇り高い奥さんから大学生時代、身だしなみについて何かと随分注意され訓とうをうけたものだった。もしその奥さんが今生きておられたら、わたしの自転車通勤などは大目玉ものであり、ただちに破門をくっているに違いないと考える。

話は少し飛躍するが、内村鑑三先生が軽井沢に避暑せられていた時（大正末年）星野温泉の若主人に書き与えられた「成功の秘訣」十訓の中に「急ぐべからず。自動車の如きも徐行すべし」というのがある。先生のこの句の意味をどう解釈すべきか、真意のほどは測り知れないが、先生は軽井沢で「道に会うものは人に非ずして樹である。栗である。胡桃である。そして多くの場合樹は人よりも善である。安心してこれに對することが出来る」といわれている。これほどの人がスピードを楽しまれるようなことはあるまい。そこで靈魂を洗い清め、深めようとせられた先生が清寂をこそしたわれ、喧噪と雑踏をきらわれたことは想像がつく。先生がいまの都会の自動車洪水やスピード狂のさまをご覧になったら、どう批判されるであろう。漱石が「とも角人の世は住み難い」といったのは人情の起伏波らんにある。だがいまの都会の住み難さはずいぶん沢山のものが積み重なってきた。いまや都会は「自動車も徐行すべし」でなく自転車の徐行すら難かしく、散歩を楽しむ路もなくなってしまった。漱石が生きていたらこ

れをどう罵（ののし）らうすることだろう。内村先生が「木は人より善である」と言われたが、その木も都会では病み患っている。公害に善性もしいたげられているのだ。ところがこれは都会だけの現象ではない。日本の田舎の果に至るまで大同小異であり「国栄えて山河傷む」となりつつある。文明とはこう言うものであつてよいのであろうか。「帰らないざ田園まさに荒れんとする」とうたつて帰ることができた郷里をもった陶淵明はうらやましい限りだ。あの豊かな清冽な水に恵まれた川、中国山脈の深山から流れるわたしの郷里の川も、いまや水はやせ衰え病んでいる。付けかえられた産業道路は自動車の横行にまかせ、自転車交通は跡をたちつつある次第だ。いったいこれが文化発展の象徴といえるのであろうか。「山ねむる山のふもとに海ねむる、かなしき国の春を旅行く」このような国を探したいのだがもはや詩の中にだけ存在する国となつてしまった。その国でゆったりと自転車旅行することなどは空想の中にだけ楽しむことができるのだ。わたしはオランダやデンマークの田舎がなつかしい。こんなことは明治人間のたわごとというものであろうか。

このたわごととはともかく、わたしは同志社大学勤務十数年、累計一週間も病気で休んだことはない。これが自転車通勤のお蔭とも思わないが、わたしの体力はまだこの通勤可能と考えている。だが自転車の方がも早乗用にたえぬであろう。その時、わたしはせめて「自転車と別れるの詩」を書きたいとねがっている。

（経済学部教授・農業経済論）